

平成二十七年年度 桜蔭中学校入学試験問題 【国語】

受験番号

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

わたしは写真で作品をつくっていますが、私の学びはすべて作品の制作にむすびついていきます。日常のなかの些細なできごとや自分のこだわりが学びのスイッチをONにして、そこから作品の構想が生まれ、作品の制作が始まると学びのエンジンが始動するという感じです。

A これまで3年間取り組んできたシリーズもきつかけはたまたま撮影した1枚のスナップでした。ある日、買い物の中であたしがパートナーにカメラを向けたところ、彼が突然ジャンプをして、わたしは反射的にシャッターを押したのです。

するとあたかも彼が空中浮遊しているかのような、ジャンプの躍動感を打ち消したような、人間が空中を水平移動しているような写真が撮れていました。デジタルカメラだったのでその場ですぐに液晶画面で確認できたわけですが、そのときの感動は今でもわすれません。写真は「真を写す」と書くけれど、ジャンプを撮ったのに浮遊に変換されたということは、写真が「真を写さない」こともあるんだ！と興奮しました。こうして学びのスイッチがはいり、いかにしてより浮遊に見えるジャンプをするか、いかにして「真を写さない」写真を撮るか、自分自身でジャンプをくりかえしながら浮遊感の研究に没頭し、それから数ヶ月後に『本日の浮遊』と題したシリーズを始動しました。自分が浮遊している写真を日記形式でウェブにアップしていくセルフポートレートのシリーズです。以来、ジャンプのポーズとシャッターのタイミング、光線と構図、撮影場所とレンズの無限の組み合わせを追求しながら、浮遊写真の可能性を探る学びの日々がつづいています。

ところで、わたしの場合、学びのスイッチをONにしてエンジンを始動させるためには、まず「OFF」にしなければならぬ別のスイッチがあります。それは固定観念のスイッチ、自分をしばっている無意識のオキテ（掟）のスイッチといえるかもしれません。作品づくりにあたっては、かならずこのスイッチをOFFにします。

段階的にいろいろなオキテのスイッチをOFFにしていくなければならないのですが、たとえば「写真を撮るには、技術を習得しなければならない」というオキテのスイッチ。まずこのスイッチをOFFにします。

じつは、わたしは写真学校や美術学校などで写真をアカデミックに学んだことがありません。だから技術にたいしてコンプレックスをいだいているのです。父が写真を趣味にしていたこともあって幼いころから経験的に写真を撮ってきましたが、写真の技術を体系的に身につけたことはありません。暗室で現像や引き伸ばしをした経験もありません。そういうわたしにとって、「写真を撮るには、技術を習得しなければならない」というオキテは、自信を喪失させ、制作のモチベーション※1をうばう恐れのあるマイナスなオキテなのです。

ところで、ちまたではよく「コンプレックスを克服したから〇〇をできるようになった」という声を聞きますが、わたしは、コンプレックスは良くも悪くもその人の人格の一部、アイデンティティ※2の一部、もつといえ、その人をかたちづくる大切なエッセンスだと感じています。わたしの場合はそこをベースに作品の構想が生まれてくるという実感があるので、コンプレックスは克服すればよいというものではないと考えています。そもそも、コンプレックスをほんとうに克服などできるだろうか、できるのは克服ではなく、共存なのではないか、とも考えています。

ちよっと脱線しますが、わたしのコンプレックスに関連して、中学1年生のころの記憶でいつもおもしろいことがあります。美術の授業で、和紙細工の張り子人形をつくったときのことです。伝統工芸品でよくある、人形の首が揺れる「首ふり張り子」です。クラスみんながトラやウサギなど単体の動物を提案するなかで、わたしはたくさん動物がひとつの手袋に潜り込むというウクライナの民話を張り子で再現することをおもいつきました。手

袋の口から飛び出たたくさんの動物の首がいつせいに揺れる、というアイデアでした。先生に提案したところおおいに褒められ、わたしは有頂天になって制作にとりかかりました。ところが、複雑な構造を仕上げるのはおもしろいけど、退屈で①の折れる作業をくりかえすうちに、構想をおもいついたときの情熱は徐々に失われてしまいました。

できあがった張り子を見た先生はひどくがっかりして「アイデアはよかったのだけど……仕上がりがね」といったのです。わたしは先生の期待が失望へと転覆したことに大きなショックをうけ、よいアイデアをおもいついても、それを形にできないかぎりBアイデア自体も時間をさかのぼって否定されるのだ、と感じたのでした。このとき以来、わたしのなかに、自分は写真にかぎらず技術面に弱い、そしてアイデアはだせても実現力にとぼしい、という自己認識とコンプレックスが形成されたような気がします。

さて、そのようなわたしは、浮遊写真撮影の技術面に実際どのように対処しているかですが、答えはいたってシンプルです。自分はジャンプに専念し、撮影技術は人にゆだねるのです。もちろん、だれにゆだねるかはものすごく重要で、世界観を共有できて、わたしのコンプレックスを許容してくれて、かつ技術に長けている人でなければなりません。そしてその人がわたしの制作コンセプトに共感して、無条件で手伝ってくれるのであればなりません。わたしの場合、その人はわたしのパートナーでした。彼自身、写真で作品をつくる作家であり、もともとわたしがアシスタントとして技術の手ほどきを受けた師匠でもあります（浮遊写真のきつかけとなったスナップ写真で最初に浮遊した人でもあります）。

幸いにも彼がわたしの提案を受け入れてくれたことで、技術を彼に一任し、わたしはジャンプのポーズと撮影結果だけに意識を集中することができています。そのおかげで、浮遊写真の表現の可能性はどんどんひろがっています。もしわたしが「写真を撮るには、技術を習得しなければならない」というオキテのスイッチをOFFにすることができず、これにしばられていたとしたら、技術の習得に何十年もかかって、もうジャンプの体力をなくしていたにちがいありません。（浮遊の撮影では毎回数十回から数百回のジャンプが必要なのです）。それでは②アもイもなかったとおもうのです。

ところで、OFFにしなければならぬオキテのスイッチはほかにいろいろあります。「Cやり始めたことは、最後までやり遂げなければならない」「D退屈なことでも、「一生懸命やる」ことが大切だ」といったものから、「すぐれた写真家は多くのショットを撮らない」「すぐれたアーティストは決断が早い」といったものまで、さまざまです。こういうものをわたしはぜんぶOFFにします。Eどれも一見もつともらしくて、人のコンプレックスを刺激しそうなものばかり。こうしたオキテは外側から人をしぼるのではなく内側から、わたしの場合はわたし自身がわたしをしぼるのではなく内側から、意識してOFFにする必要があるとわたしはおもっています。

わたしにとって学びのスイッチをONにすること、そして学びのエンジンを始動することは、まずは自分をしばっている無意識のオキテのスイッチ、固定観念のスイッチをOFFにすることから始まる、といえそうです。そしてF自分のなかのコンプレックスを克服するのではなく、それらと共存していくことをとおして初めて、作品のメッセージをだれかの心に届けられる可能性がでてくるのかもしれない、と感じています。

（林ナツミ「浮遊する自由からの学び」『じぶんの学びの見つけ方』

※1 行動を起こさざるきつかけとなるもの

※2 自分らしさを自覚すること

問一 ― Aについて、「たまたま撮影した1枚のスナップ」がなぜ3年間も続くシリーズのきっかけになったのでしょうか、説明しなさい。
問二 ― Bのように感じたのはどうしてでしょうか、説明しなさい。
問三 ― Eとはどういうことですか、――C・Dを例に挙げて、説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

歩を進めると、足下の雪が鳴いた。登瀬は、音に耳を添わせて数を唱えはじめる。

― ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう。

つぶやく声が、等しい間合いをとって足音に重なっていく。右手に手桶を抱え、前のめりに進むうち、山際から朝日が顔を出した。白一色に塗り込められた村の景色が、途端に息づいていく。

雪を踏む音は蛙の鳴き声に似とる、と歩きながらも登瀬はちらと思うのだけれど、考えが膨らみそうになるのをひとつ深呼吸して追い払い、頭の中を真っ白にする。そうしてただ、身体で拍子を刻むことだけに心を傾ける。

― 十二、十三、十四。

瞬きをするたび睫毛に降りた霜が飛んで、目の前を光の粒が駆け回った。息をすれば鼻の奥がツンと凍みる。立春を過ぎても木曾路には冬しか見当たらず、村を埋め尽くす雪は未だ夜ごとに背丈を伸ばしているのだ。

1ちようど「三十」で、登瀬の身体は井戸の縁にぶつかつた。自然と笑みの上つた顔を、今来た道へと振り向ける。自分の刻んだ足跡が一直線を描いているのを確かめて小さく頷いた。

かたわらに手桶を置いて釣瓶を落とすと、この寒さで井戸水にも薄く氷が張っているのか、下のほうから槌で木を打ったような音が響いてきた。伸び上がって暗い井戸の中を覗き込み、「あー」と叫んで跳ね返ってくる音に耳を澄ます。と、すぐ後ろで「なにしとるだが」と声がして、登瀬は飛び上がって身を起こした。

「われはまだ、妙なことで遊んで。よぐまあ、ひとり遊びを思いつくだね」

やはり水を汲みにきたらしい近所の女房に呆れ顔を向けられて、しどろもどろに朝の挨拶を返す。女房は笑みを浮かべ、登瀬のよれた襟を手早く直した

「すぐに歳ノ神さんのお祭りだに、まあず寒いだんね。陽は眩しいのにうー」「はい。たんと凍みますなし」

そう応えた登瀬が、綿入れも羽織らず、着古してペラペラになった木綿の袷一枚きり、しかも襷がけしているせいでひじの上まで袖がまくり上げられているのを見て、女房は苦笑した。この娘の身なりで冬を感じさせるのは、足の甲をすっぽり覆った藁沓くらいなものなのだ。

引き上げた釣瓶の水を手桶に移し替えると登瀬は、

「じゃ、行くだで。お先」

と会釈して、今度は歩幅を小さくとって歩きはじめた。ひい、ふう、みい、よう……。行きは三十歩、帰りは手桶の水をこぼさぬように少し刻んで三十八歩。家から井戸までの道のりを、登瀬は毎朝拍子で計る。

藪原宿下町の人々はこれを、「登瀬の無言参り」と呼んでいた。お参りの行き帰り、たとい知人に会っても口をきかぬことで願掛けをする「無言参り」になぞらえているのである。平素は朗らかな登瀬が、小声でなにごとか唱えつつ井戸と家とを往き来する姿には近寄りたいたい気魄があつて、村人もこのときばかりはみだりに話しかけぬよう気をつけていた。いったいなんの願を掛けとるだがね、と井戸端で女房たちは、十六の娘が決死の①ギョウゾウで水を運ぶ様を真似しては笑い合う。意地の悪い嗤いではない。猫をじやらすときに自然と口元に上つてしまう笑みと等しい。

登瀬は、周りにそんな気遣いをさせていることなどまるで知らない。数を数えるときは、心になにも置かないようにしているからだ。ただ五感だけを研ぎ澄まし、等しい拍子を身体が刻めるよう習練しているのだった。けれどそうしながらも登瀬の目は、朝日を受けた尾根の美しさや、街道筋を横切る下横水の澄み切った流れを感じとっている。そのたび「きれいだなし」と胸

問四 ― Fとは筆者の場合はどのようなことでしたか。説明しなさい。
問五 ― ①の慣用句の□に入る、身体の一部を漢字で答えなさい。
問六 ― ②の慣用句の□ア・イに入る語を語群から選び漢字に直して答えなさい。

【語群】 はじめ おわり おや こゆめ もと なに

の奥を震わせる。

藪原宿は、中山道の宿場町だ。

江戸から京を繋ぐ道のりのほぼ真ん中にあたる木曾十一宿のひとつで、信濃国の北に位置する賛川宿、奈良井宿、宮ノ越宿とともに上四宿と呼ばれている。險路の多い木曾路の中でもとりわけ高地で、旅人からは難所として恐れられていた。

(中略)

ちようど二十四歩で街道筋まで出た。至る所に掲げられた「②ガンゾ」お六櫛の幟がはためき、家々からは木を削る音が立ち上っている。登瀬は矢も楯もたまらず駆け出したいのを我慢して慎重に足を運び、きっかり三十八歩を刻んで家の前へと辿り着く。

間口は三間一尺、奥に長い造りである。戸間口をくぐると細長い通り道のような土間があり、それに沿って入り口側から順に、ミセとも呼ばれる板の間、煮炊きをする勝手場、家族が寝起きする八畳二間、納戸代わりの小室が並んでいる。街道沿いに設えられた板ノ間は櫛挽にとつての作業場で、窓の代わりに三段重ねの人見戸がはめ込まれており、その中段に収まった人見障子から射し込む明かりを手元に取り込んで仕事をするのだ。

戸間口の潜り戸を開けると、すでに父の吾助と弟子の太吉が作業をはじめていた。鋸の拍子と木の芳香が家の中に満ち、吾助の膝掛けには大鋸屑や鋸粉がもうずいぶん溜まっている。櫛挽き鋸を操る父の動きが止まったところを見計らい、登瀬は板ノ間に声を掛けた。

「父さま、すぐに手伝うなし」

太吉が顔を上げた。が、父は低く返事をしただけで、目は櫛木を挟んだ盤に据えたままである。

櫛挽というのは朝飯前から板ノ間にこもって仕事するものだ。登瀬は幼い頃からその道理を身染みを感じながら育った。父に言い聞かされたわけではなく、職人町である藪原下町の櫛挽たちの暮らしぶりに、そう教えられてきたのだ。下町では年を通して、鶏の声と先を競うようにして櫛挽く音が立ちはじめ。冬はどの家も、まだ暗いうちから板ノ間に灯がともった。

しかしその中にあつても、吾助の朝は飛び抜けて早いのだ。毎朝、暁七ツには跳ね起きて、素足のまま土間に降り、甕からすくった柄杓一杯の水を大きく喉を鳴らして飲み干す。口もとを拭う間も惜しんで板ノ間に座り、両手の指を鳴らして膝の前に据えた盤のツグに櫛木を挟んだと思ったら、もう鋸を当てている。そこからは、三度の飯のときに手を休めるだけで、延々夜更けまで櫛を挽き続けるのだ。一日中座り詰めるおかげで吾助の座布団はすぐ紙のように薄くなり、しよつちゅう中の藁を換えねばならなかった。座布団をはぐるとその下の床は③セキネンの重みによって艶やかな円形に窪んでいる。吾助は、その父親に櫛作りを教わりはじめた六歳の頃から三十四年の間、一日も欠かさず同じ場所に座って櫛を挽いてきた。物心いつてから吾助の仕事ぶりをつぶさに見てきた登瀬が、未だ父に接するとき身の引き締まる思いがするのは、三十四年という年月への畏れなのかもしれない。

甕の前まで行き、音を立てぬよう手桶の水を移す。勝手場からは、朝飯の支度をしている母の松枝の声が響いてくる。小皿取って。包丁で菜切つて。指図に従い、妹の喜和が慌ただしく動き回る気配が伝わってくる。登瀬は湯気に身を隠して、忍び足で板ノ間へ向かう。それを、あつさり母に見咎められた。

「もう飯だんね。少しはわれも裏を手伝わんね」

聞き倦んでいる小言に、襟首を掴まれる。

「したつて……」

「したつてもなんもねえずら。おなごの仕事は飯炊きと櫛磨きだ。櫛を挽く

のは男の仕事だ。朝は父さまに任せでこつちさ手伝え」(中略)

「わがった。ほんだら足さ拭いてくるね」

登瀬はすぎ桶に水を汲み、土間づたいに表へ出た。アカギレだらけの手足をすすいでいると、すぐ脇から聞こえてくる櫛挽く拍子にたちまち囚われた。結局足は勝手場に向かわず、すんなり板ノ間へ乗り上げてしまう。

「ええのか。母さまを手伝わんで」

面砲面を寄せて太吉がささやいた。登瀬は聞こえぬ振りをして、吾助の斜め後ろに据えた自分の座布団に胡座座りし、刺し子縫いの膝掛けを広げる。櫛挽きを終えた櫛を磨きにかかるのだ。親歯の木口に粒木賊を当てて力を込めて磨くと、表面の毛羽立ちが取り払われ、木肌が艶やかな光沢をたたえていった。片面を磨き終えて櫛を裏返すとき、登瀬はそつと父の手元を窺う。吾助が櫛挽き鋸を上下させるたび、青縞の間着から覗いた太い腕に幾筋もの蛇がうねる。その逞しい腕が刻んでいるのは、梳櫛の極めて細かな歯なのだった。

(中略)

粒木賊掛けの終わった櫛を、登瀬は人見障子から入る陽にかざしてみる。浮かび上がった木目が、光の加減で生きているようにうねる。

——父さまは拍子で挽いとるんだね。

拍子が乱れぬから、当て交いなしでも加減と早さを等しく保って歯が挽けるのだ——それが、父の仕事を間近に見続けて、ようやく先頃辿り着いた登瀬なりの答えだった。吾助は歯を挽きはじめると、端から端まで百二十本を刻むまで一時的たりとも手を休めず、船でも漕ぐように同じ拍子で鋸を動かし続ける。幼い時分は、かたわらでそれを見つ、父が息をすることを忘れていたのではないかと案じたほどだった。

拍子を整えることだ。等しい拍子を頭ではなく身体で刻めるようになることだ。

キュッキュッキュツと規則正しい鋸の音が吾助の手元から生まれていく。みい、よう、いつ、むう、なな、やあ。登瀬もまた父の拍子に合わせて櫛の上に粒木賊を滑らせるのだが、速くてすぐにおいていかれる。ただ櫛を磨いているだけなのに、吾助の鋸にかなわないのだった。

隣の勝手場から、味噌汁の香りがまぎれ込んできた。板ノ間という気高い場所に、勝手場で立つ所帯じみた音や匂いが入り込んでくるのが登瀬にはいつになっても馴染めない。それだというのに身体は勝手に味噌汁に応え、腹の虫を大きく鳴らした。驚いて、自分の三尺帯廻りに目を落とす。太吉も手を止めて登瀬を見た。笑いたいのをこらえているのか、小鼻が膨らんでいる。

ちょうどそのとき、吾助が百二十本目の歯を挽き終えて大きく息を吐いた。登瀬もまた、静かに息を漏らした。自分の失態で父の拍子を乱すことなく済んだ。そのことに安堵したのだった。

(中略。この後、十八歳になった登瀬は、櫛磨きだけでなく男の仕事の一つである粗削りも任されるようになった。一方、問屋である三次屋の伝右衛門から、田ノ上村の男性との縁談が持ち込まれる。相手は豊かな大地主の家であり、元々「女としての幸せ」を重視する母の松枝は縁談を喜んだ。吾助も、日頃世話になっている伝右衛門からの話ということもあって、縁談を承諾した。登瀬は、櫛挽とは縁のない人生を送ることを受け入れかねる。が、女性ならば「仕方がない」し、自分が嫁ぐことで父のためにもなると割り切ることにした。登瀬は、嫁入りの準備として台所仕事なども覚えようと心がける。そんなある日のことである。)

勝手場を離れて板ノ間に入る。今日のうちに終わらせねばならぬ櫛磨きが残っていた。太吉はすでに家に帰ったらしく、板ノ間では吾助がひとり鋸を動かしている。癖で、つい手元を見てしまう。気配に気づいたのか、いつもは一系列歯を挽き終えるまでけつして鋸を止めない吾助が、つと顔を上げた。作業を止めてしまったことに登瀬は動じ、すぐに詫言がたが吾助は応えず、代わりに、

「ここへ来」

と、かたわらを指さした。登瀬はおずおずと吾助の横に腰を下ろす。2す

ると父は意外にも立ち上がり、自分の座を娘に譲ったのである。登瀬は驚きで声も出ず、促されるまま父の温みの残った藁座布団にくしやりと座った。吾助が四十年近く座り続けてできた床の窪みに身体がすつぽり収まると、これまで味わったことのない安堵に包まれた。

「挽いてみる」

父は、自分の歯挽き鋸を娘に手渡す。手入れのときも片付けのときでさえも、家族の者にも触れるのを禁じていた鋸であった。登瀬は不用意に受け取ってしまったから、事の大きさに気づいて手が震えた。

「ええんだか？ 触っても」

「ええもなんも、もう攪んどるだが」

吾助は小さく笑い、「一遍しか教えんぞ」と柄を握った登瀬の手ごと、鋸を櫛木に当てた。手前にグツと引く。父の手元を見続けて想像していたより遙かに激しい手応えがあった。登瀬ひとりの力であれば、よほど踏ん張らねば挽けぬ重みである。刃先まで挽き込むと、今度は鋸を向こうに押し戻す。これは手前に引くよりずっと軽く滑っていく。挽くときと同じ④ヨウリヨウで力を込めては櫛歯を傷つけてしまうかもしれない。

登瀬は密かに驚嘆していた。同じ拍子、同じ力で鋸を動かしているとばかり思っていたが、父は、引くのと押すのとで微妙に力加減を変えていたのである。もしかすると櫛木ひとつひとつの堅さを見極めて、その⑤ツド歯挽きの加減を変えているのかもしれない。単純に同じ拍子と見えていた作業の裏には、長年の勘によるきめ細かな調整が隠されていたのだ。

——こんなに難しいものだったか。

粗鉋も上鉋も一通りこなせるようになっていた登瀬は、歯挽き鋸に移っても刻をまたずに使えるようになると信じ込んでいた。むしろ、父と同じく当て交いなしで挽くにはどうすればいいか、あれだけの本数を素早く挽くにはどんな工夫があるか、先走ったことばかり考えていたのだ。それが、一本の歯をまともに挽くことも容易ではないのだと、このとき思い知ったのだ。

櫛というものの奥深さにまたぶつかった。これまでであれば、そのたび登瀬の気持ちは高らかに鳴ったものだ。一向に飽きのこない面白さと、一生を掛けるだけの深みと、それを抜き出した技量でものにしている父への尊崇が一気に渦巻いて、とてつもない昂揚を巻き起こしたのだ。自分も習練を重ね、どれだけかかっても技を身につけようと、新たな覚悟が湧いたのだ。この家に生まれたこと、吾助の娘に生まれたことは、櫛挽として高みを目指す決めた自分にとって、なんとという幸甚かと嘯みしめずにはいられなかったのだ。

登瀬は、父の力加減を自分の手に覚え込ませようとただ一心に鋸へ向かう。拍子を乱さぬよう。心を白くして。

3 ぼたぼたと、櫛木の上に水が落ちた。

それがなんであるか、登瀬自身はじめはわからなかった。手元を見詰める視界が滲んでようやく、その水が自分の目からこぼれ落ちていることを知った。

吾助も娘の涙に気付いて束の間、手を止めた。が、すぐに岩のような顔を一層いかめしくして、鋸を動かしはじめた。木を削る音が層を成して板ノ間に満ちていく。揺るがぬ拍子に守られ、音は延々と続いていった。

(木内昇『櫛挽道守』)

※1 敬い尊ぶこと ※2 気分がぐつともりあがること

※3 とてもありがたく、幸せと思うこと

問一 ①⑤のカタカナを正しい漢字に直しなさい。

問二 1とありますが、なぜ「自然と笑みが上」り、「小さく頷いた」のか、全体を読んで考えなさい。

問三 2とありますが、登瀬はなぜこう感じたのか。「これまで味わったことのない」理由も考えに入れて二百字以内で説明しなさい。

問四 〇は、文中ではどういう意味で使われているのですか、言葉の意味を答えなさい。

問五 3とありますが、登瀬はなぜ涙を流したのですか。理由を説明しなさい。

[illegible]